

以執備孝義傳

沼田安執

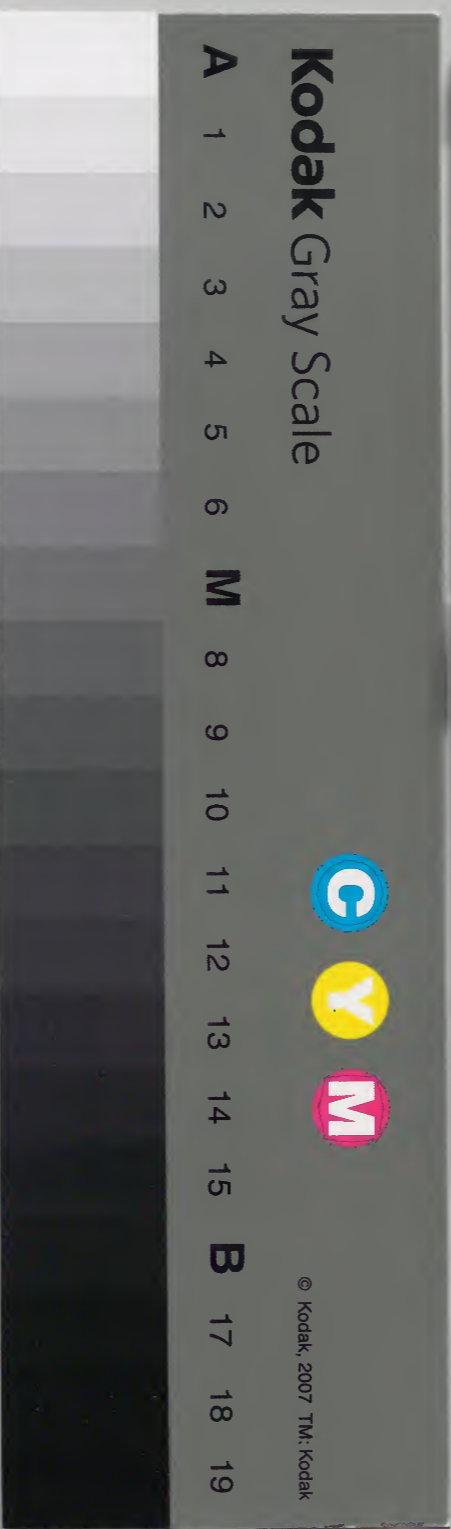
卷二

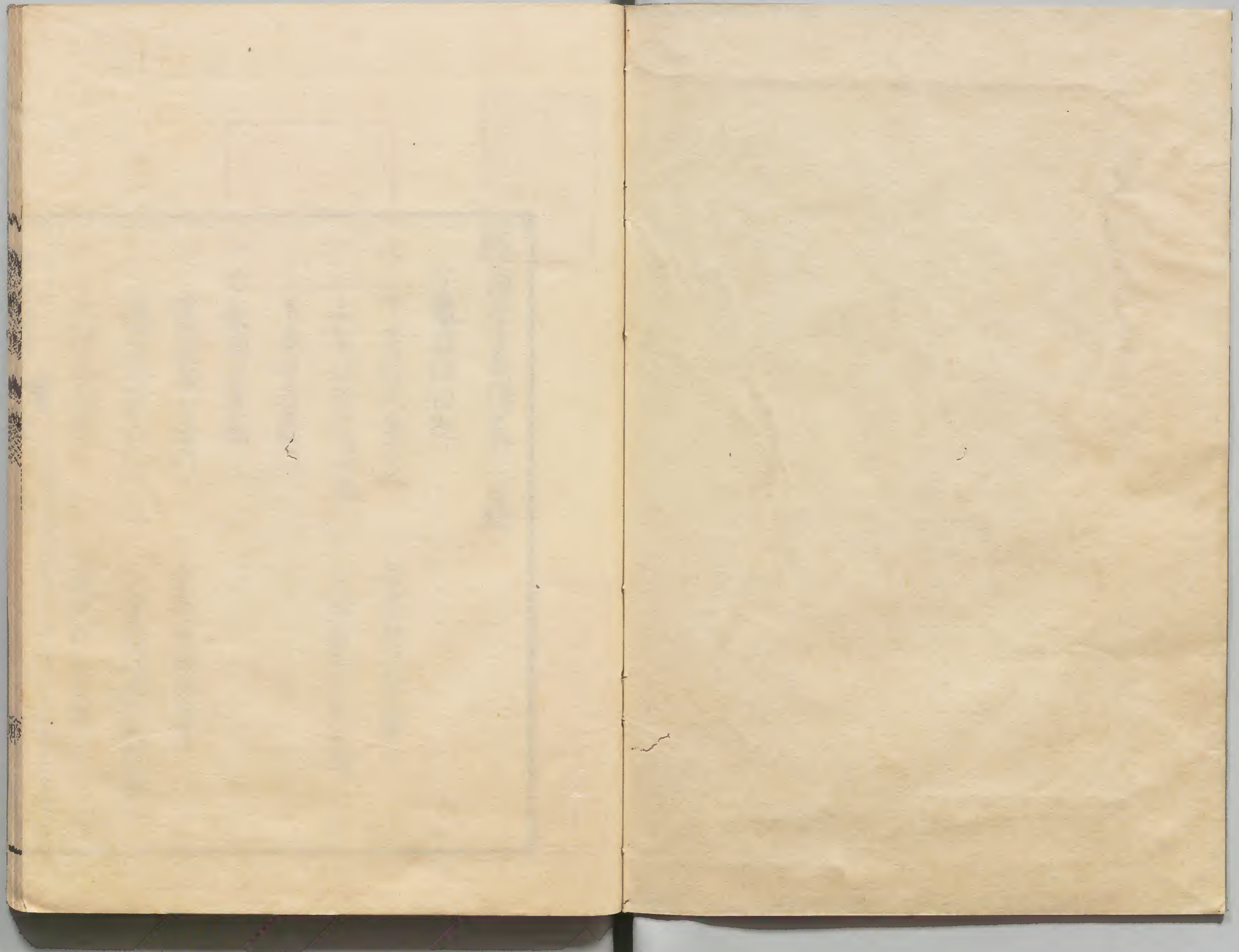


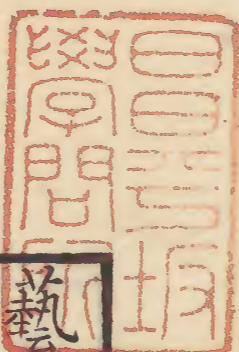
和書門		一五九九三號	九冊
		一七九函	四架

庫文閣内		和書
五八函	五九三冊	

内閣文庫	
番號	和 15993
冊數	16 (2)
函號	158 27







備孝義傳卷二目錄

安藝國沼田郡

下安村兄弟三人

上安村平七 附以め

下安村源左衛門

安藝國安藝郡

蒲刈島三右衛門

蒲刈島兵太夫

仁保島朝都

淺草文庫

上安村次郎兵衛

大塚村勘十郎夫婦

中野村市郎兵衛

仁保島大河浦李兵衛妻

府中村源三郎

孝義傳

卷二目錄

牛田村三十郎

府中村六兵衛妻あり

牛田村源三郎妻あり

警固屋村お浦半右衛門

坂村茂三郎

浦刈島新助

安藤村三郎

下安村三郎

下安村三郎

下安村三郎

安藤村三郎

孝義傳卷二 巨金

藝備孝義傳卷二

沼田郡

○下安村兄弟三人

下安村よ又兵衛と大南つ其元妻つとむびて兄弟三人あり
くま何まも孝友の性有り又遺言よたがまも愛敬久
しくおとろへず又よく八公の法度をするよりて享保丙
申ねや一錢をそとくをとたまはる。

○上安村次郎兵衛

次郎兵衛ハ其質すも厚くして貢を納むるといふさきなら

賊役をばいもむ人も人よ後するべき事その家を負へるべし
凶事も公のすまひを仰ぎしりとも國恩けりつちをせめてハ
ごよつばらひをかかけ奉らばいも。たゞよ覺悟一たるもよめん
享保壬寅の正月賞して米をたまひりたる。

○上安村平七 附ひめ

平七ハ家きりめて負へかりくるが母をいもむのこころ
りたりて淨一母酒をたれくれば絶すはせすいふいと價の
はごまがいもむと歎かぬいもその家きりてひよ路のちりり
何れよりして市より酒をかひまりは妻のいよひいもむり。

その餘利をいもむのすまひ飲めりてそれと養のいもむを
を恨みせめてハ寺詣りとも母の意よをかせんともあひ
寺に説法りくとすけハ遠近をいもむ書置夜をわかむいもむ
背負ていもむいもむ。又同村いもむいもむの女ありこれと孝を
いもむ。俱に賞よあひぬ次郎兵衛と同日ありいもむ。

○大塚村勘十郎夫婦

勘十郎妻の名はさる夫婦母はさる。何れは夏れ
夜帳をいもむればかきる蚊を拂ひぬの夜衾さるればあ
りが衣をありせて母より母糕をたるといもむ。

孝行傳 卷二

糯米をほくり日ごとよばせとて、くろむ都てその望める物ハ
 力をまらめてそれをもむ老人けならひとぞくまらまら
 どんとを福ぶ、甚十郎、まよつが田業をやめて負てゆき
 ぬ路よまこ一坂あり、母れ息迫からんことを恐まて妻ハ
 い流も湯をたづき入て、随ひぬ、甚十郎、妹ありくるがくよゆ
 まて、後やめよ、その其家たひらけひまぶ、甚十郎、こぞさ
 うらもつ何くまてカつけてぞやつと、一夜、妹が所よの
 ぬまもれ、こと有てかくと、吉くれば、甚十郎、よりの誰が所
 為と、さうれども、其あつと、ぬが、まとも、慟て、妹よ、いふや、

是き、ぬ事たる、一、汝前の世まで、物をかり、今か、まよつと、
 あり、さめ、あらず、腹たら、恨むこと、あつれ、と言、は、め、く、り、
 少く、上を、おろし、年の、え、ま、りの、繩、俵、よ、つ、た、る、ま、て、い、や、
 くら、う、う、で、き、げ、く、れ、ハ、多、れ、内、よ、ま、す、う、り、て、も、さ、れ、た、ま、ん、
 甚十郎が、俵子ありと、人も見さる、さう、よ、あり、くる、と、ぞ、寛
 政元年七月、米十、た、ら、ら、た、ま、す、り、ぬ、

○下安村源右衛門

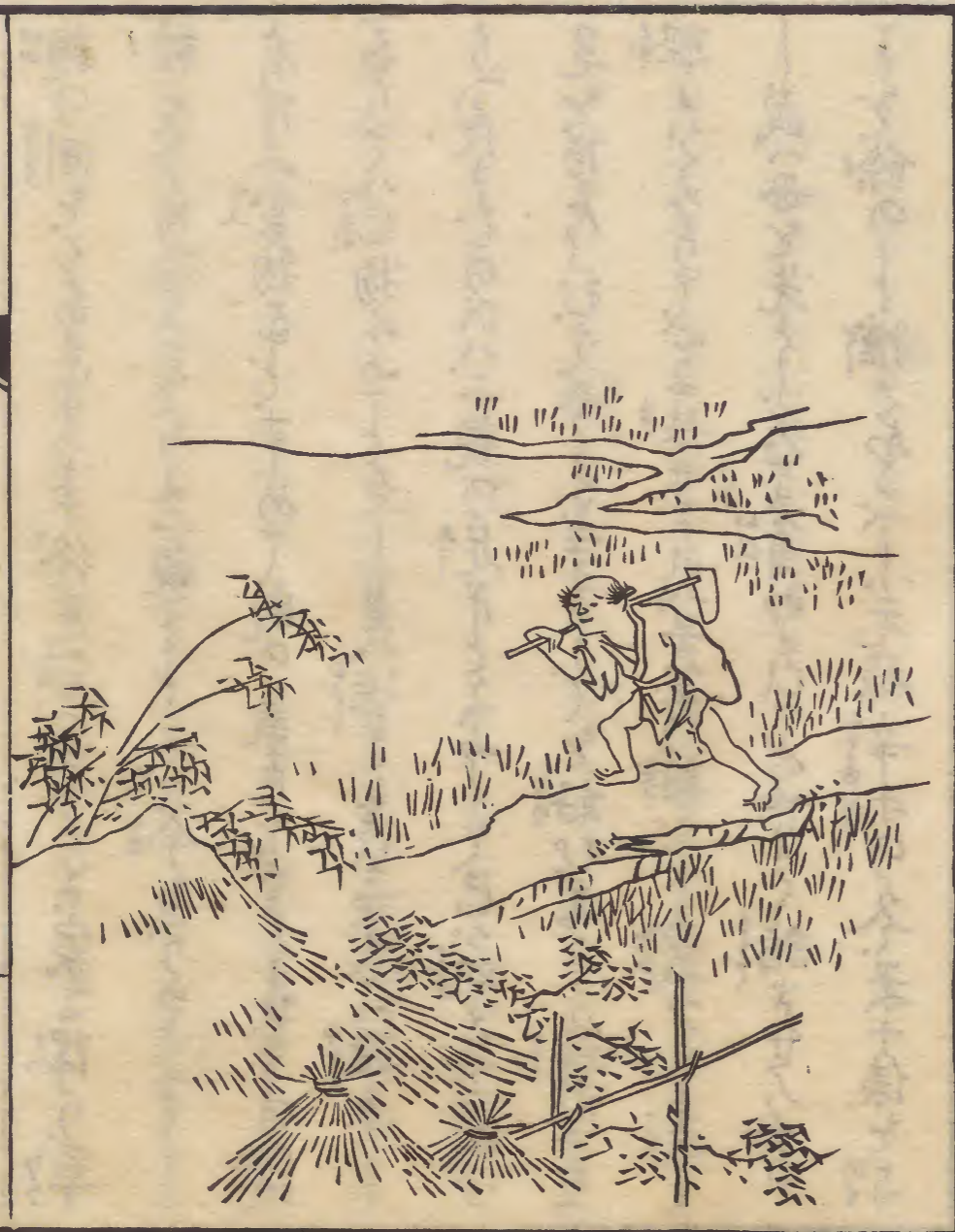
源右衛門ハ、享保の、比、賞、わ、り、ゆ、り、た、る、甚、右、衛、門、が、孫、あり、青
 原谷の、組、改、あり、くる、が、父、祖、の、風、を、け、う、て、家、内、や、ら、ま、り、

睦く素朴^{じゆんぱく}よりて世^よれ春風^{はるかぜ}よりほらざればひと谷^やの民
どもに於^おむくけすこととめらる。寛政^{かんせい}成^{なり}れんとて
めれ詞^{ことば}をたすりりあらためて。在^ある屋^やの役^{やく}よなまされらる。

安藝^{あき}郡^{ごほり}

○蒲刈^{かまかり}島^{しま}三太郎^{さんたろう}

三太郎^{さんたろう}の八^{やち}所^{しよ}き田地^{でんぢ}より出行^{いっせ}さす。二親^{ふたぢや}の起居^{きよぐ}をうかひ
氣色^{けしき}よりとどめまじらして。怒^{いか}れぬとぬその出^いる事^{こと}よ。妻^{さい}
子^こよりしらくらけ家^{いへ}よりあらぬ。一^{ひと}まはらばく^{ばく}と
そのあつし。めてそ生^いる山田^{やまぢ}よりめすまよらる。



親の側をさめしむ。事終まば足をさらふ。家より草鞋ぬぎ取りず。たちよ。二親よまへえ。只今わりのいとすう。有りぬ食物もどすめて。親の氣色をりませ。その後あらで。八已物ふことなり。夏ハ涼きよ。けせ冬ハ温ま。い。ら。夜さむのひハ二親の足りとよふ。て。己が肌めて親の足を。何たりむ。父母も。ま。ま。て。を。好む。さ。る。よ。腰が。ま。り。脛よ。く。ま。り。て。い。よ。任。せ。ざ。れ。ば。三。太。南。つ。朝。こ。よ。或ハ父を先と。或ハ母を先と。さ。よ。負。め。ひ。て。い。や。す。く。詣。せ。し。ら。る。と。と。餘。の。と。推。せ。る。べ。し。元。祿。辛。未。の。冬。果。十。俵。を。与。

て。その孝と賞一たまふ。

○中野村市郎兵衛

市郎兵衛ハ父。弥兵衛。中風を。や。と。り。び。ば。う。ら。身。一。ろ。こ。と。さ。ふ。か。一。え。さ。る。よ。起。臥。の。た。す。け。二。便。の。い。ご。ま。め。く。す。り。お。す。て。父。が。見。す。く。思。ふ。お。ま。り。負。て。ゆ。ず。す。く。い。か。て。お。さ。ら。ぬ。だ。よ。老。ハ。い。ね。か。て。な。る。よ。ま。す。て。病。り。た。り。る。身。た。ま。ま。ば。く。い。か。く。福。入。ら。ん。と。思。ふ。を。市。郎。兵。衛。い。う。た。り。疲。る。夜。ま。て。も。幾。夜。な。と。ふ。く。起。て。父。の。心。の。ま。ま。い。よ。あ。は。く。ひ。ぬ。織。た。る。もの。も。躬。自。と。ら。ひ。て。終。よ。人。の。ま。よ。あ。ま。し。め。ず。又。父。が。好。め。る。もの。と。ら。へ。び。と。

けのたまもさう賣つても進めればいよもやとせざるばかれ
 乃ぶまはく盡さるゝとかな。如此するも。廿七八年。一日れ如く
 露なるも。俵色あり。三太南つと。向く。褒賞をたまひぬ。
 世え。健かる。軀りちても。その子れあり。くれば。行なき。所も。
 ゆさ得ず。食まり。いさ。その人。得く。や。あ。親。ふ
 き。ゆら。す。この。孫。兵。南。は。足。痿。て。れ。自。由。あり。人。の子。たらん
 の。お。り。ひ。さ。ら。る。べ。し。

○蒲刈島兵太夫

兵太夫ハかまうり島の長いその家にて富もあらず。

性仁孝子て母をいよとむこと敷又その心を推廣めて一
 族を睦く島人をありれむこと亦深し或ハ穢或ハ穀ふとやま
 かあたてその足を補せむる人返せけけぬ。返せ
 ざるを責むらす。げ。島の長かれ。告出。の。も。あ。り。が
 い。け。し。ま。さ。さ。之。渡。て。正。徳。四。年。十。月。五。日。國。府。よ。め。き。れ。白。銀。を。賞
 目。たま。り。り。く。る。

○仁保島大河浦李兵衛妻

大河浦の産して大河浦の貧民李兵衛が妻となりぬ。
 夫は病臥すれば。いよもや。いれ。い。り。あ。り。て。早。か。る。

まて養ひけるが夫す中風一数年ありて死せり。七十八
 歳の多幸のいたり最ありき。且ひとり母の段原よ
 ありけるが是もやもふ人あくなりこれに迎來りてけり。ある
 ことまて篤一近所の人。おれがを負苦めるとありし。物出
 何れめて救ひたまへんと議よ。おれを聞て御志のた
 かなだけあくゆ。男あらばいらませ。返りまらする
 ことひらめ。女の身れかあ。市恩むく。覺はる。あ
 され。世す。何らん。い。あ。い。い。い。い。固
 い。い。い。い。い。元文唐甲の二月。おれを何たりて賞せられ。

○仁保島朝都

仁保の崎。洞崎よりよ。朝都とよ。目まひあり。兄平三郎ハ
 漁師もま。おれ。家よ。あ。朝都。い。早起。ま。母の
 方は打む。い。市恩あり。が。い。い。母起ぬ。おれ
 床を。お。水を進。せ。嫂。い。調。お。朝都。さ。い。
 一。母。す。め。食。終。ま。お。その器を。お。い。夜。は。お。
 ま。い。を。お。又。お。起。て。母の安否。を。お。母酒を
 好む。い。朝都。日。よ。あ。お。お。酒を。お。飲
 めて。悦。い。寛。後。よ。お。今日。お。お。方。よ。行。つ。ま。の



時よハ帰りのいと苦て後たらぞ終よその方を違へばその
 時と過さず雨風のたげきまよしかるらむ家路たどらで
 帰る一夜も外よやどることなす所の長より申してぞや
 同く賞せらる。

○府中村源三郎

府中村よ源兵衛とら民何の男子なけま高宮郡源川村
 より婿養子にて源三郎とよぶれ孝子なり源兵衛は
 なくを負くあり後よ其屋宅をいとまてらひてけの
 けらよけがいのるがゆく口惜と思ひんれ源三郎は

父を悦びめんと夜をひ日夜力をとげす身をも碎り
かせぎて遂よとのごとく家送りて移住せしむ
原兵衛のめをらすむらびぬ朝暮れは久寒暑のせ
ぎおそ孝子のあまする所せむりよふ一寛保三年
二月末たまりんる。

○牛田村三十郎

は村よ三十郎とらふまばき民れ母と住る有り已がりて
田とてハ耕たらざれば人の為よ水く日ほきまどて
あま世汲とる一ぬ外ハやうれゆきても人の休てあま

己つあがりて母れ氣色とらあふ又その得る所の賃あども
たづらふ母よまばけ暫あまよとあま烟草をくたづ
りて髪を洗う糸單のけも衣きて肌をおひさああら
と食れをあまばけ母のやあひ力をあて優ありたり
されど夏れ夜の蚊のせせむも張ぬす帳のあまれば
蚊をさうて曉よりたふ冬夜のさう泣もあまば
とあま薄くまじり已が腹をぬませて母の足をあたま見
聞くる人いあはれ思入寶曆辛巳れ五月清あり
あたりて彼がせせのやうたあまあくなまりのれ

この村の人々も悦びりしなり

○府中村六兵衛妻の事

六兵衛が妻はもと父の色助よりして同一村に在るるが要瘡
 とやみ鼻をさして自らさみして足もたれぬに苦しむるに
 病も臥たすは家も貧乏を加之心も頑固にして妻をわ
 せしむるにいと苦しむるに痛かき六兵衛も
 苦し情あつたの事しやうりりかよひておぼへたりし
 たりぬ終つていほしむるに孫もあつたもいと色助
 りの家より得らんといふ夫婦に悲かきしははもて有

わる今もいふ事もなむ能くおぼへたりし留りて
 切にたれぬに苦しむるに孫もあつたもいと色助
 思ひて六兵衛も父の色助の妻にいと推者よも置
 しはかきいと苦しむるに孫もあつたもいと色助
 難しはかきいと苦しむるに孫もあつたもいと色助
 あつたもいと苦しむるに孫もあつたもいと色助
 事この事もあつたもいと苦しむるに孫もあつたもいと色助
 わる今もいふ事もなむ能くおぼへたりし留りて
 切にたれぬに苦しむるに孫もあつたもいと色助
 思ひて六兵衛も父の色助の妻にいと推者よも置
 しはかきいと苦しむるに孫もあつたもいと色助
 難しはかきいと苦しむるに孫もあつたもいと色助
 あつたもいと苦しむるに孫もあつたもいと色助
 事この事もあつたもいと苦しむるに孫もあつたもいと色助
 わる今もいふ事もなむ能くおぼへたりし留りて
 切にたれぬに苦しむるに孫もあつたもいと色助
 思ひて六兵衛も父の色助の妻にいと推者よも置
 しはかきいと苦しむるに孫もあつたもいと色助
 難しはかきいと苦しむるに孫もあつたもいと色助
 あつたもいと苦しむるに孫もあつたもいと色助
 事この事もあつたもいと苦しむるに孫もあつたもいと色助



へてして野蛆ノムシをももさへかじりて自ら觸さわるはかた敷
 ともどたどとも湯ゆはせち衣きぬ服はきもせど洗あらいめむかたぬが
 限かぎあはれりくむがむもたげにすむ怒いかり罵ののしりて野むしと
 ありそりぎう物ものなりとていふも持もちてゆきむをいし進すす
 りかきていも命いのちはむなむといはぬか秋あきの過すぎりぬか
 家いへの物ものあるはばかしのいふにむのいふにむのいふに
 あり大おほい葉はもなまにいりて肉にく外ぐわいのいふにむのいふにむのいふに
 りるむがた作たつかりたるのいふにむのいふにむのいふにむのいふに
 長女ちやうぢやうの年とし十三さんじゅうさんのいふにむのいふにむのいふにむのいふに
 日ひこの日ひ

出でて小貝こかいをひらひ。村内むらうちより廻まわりてその價あひをえて八道はちだうのむど
 二十にじゅう丁ちやうどりのも有あるもむもあらざる母ははよりかよとて持もちまりぬ。
 二親ふたおやを見みあくるなるむど。村むらの長等ちやうとうその善行ぜんかうを見聞みきこて。
 阿あとれよおりの物もの阿あとくをいふるが。遂つひは狀まじ奉ほうりてれむ。
 阿あとくよ。鳥と目め若わ干かんたまひて。蓑かさせられく。安永あんえい永えい年ねん八月はつげつの
 こふあり。

○牛田村源三郎妻とむ

花はな八はち沼ぬま田た郡ぐん中調子村なかつてしむら八兵衛はちべゑう女によめなり。廿二にじふにの年とし。安永あんえい永えい年ねん。牛田村うしまたむら源三郎げんざうらうが妻つまとむ。其家そのいへ買かひ方はた姑ぢやうあり。祖おぢい姑ぢやうもれあり。

花女子五人まうけらるる。長女ハけねる腹を痛む。次女まて
 足がらんちり。上まへ老る人をつらね。下まへ足がらんちり。小兒
 おほし。さうらま。安永しまのこも。孫三郎。肺癰といひのを
 病で。昼夜膿血を吐く。やまがして。左に服腫潰て。そのいたむこも。
 まるま。旧方もす。あやま。病をうけて。昼もをりて。夜ハ
 よりま。苦む姑ま。はひま。心地あやま。祖姑ハ恙といひ
 づども。歌をたぐ。ふけられ。いよく。心ゆる。がたし。その家。歳
 額四石餘の田あり。さらま。人の田。何げらる。まて。おま。六石餘の
 地。ま。花をれを耕の。ま。夫ま。か。間を守り。その。給米



くる。舅姑も人尋ねまじは花が孝行をかへり出ては泣く。夫ハ
 己央の冬、遂まてかゝるなりぬ。花悲むことあきなりあく。野
 邊の送りも厚くぞなりぬ。今年ハことし。費もたねかり。が
 舅姑もきらせずして。ワキも入し。貢物もつり。早く納
 めくれ。人々もそのち。稼穡艱難せる。と。殊に感
 くりがき。人々も聞え。き。安永九年。庚子。二月。倉禾
 七俵をたまひ。花こと。四十五なり。がくて。舅ハ。子よ。はれて。
 病もくり。又二年病ふ。つ。辛丑の夏。よりハ。さら。重り。ハ。ハ。
 花。ふう。う。れ。ひ。て。薬。を。す。め。食。物。を。あ。く。め。力。け。限。を。は。く。

くる。今ハ。が。う。く。見。え。くれ。惜。む。お。ひ。さ。ま。の。人。あ。を。
 昼。夜。び。ぎ。の。よ。ま。お。ま。れ。せ。て。何。か。ら。目。も。せ。ず。は。り。ぬ。見。人
 感。せ。さ。る。ハ。な。し。舅。ハ。その。秋。ら。日。遂。に。露。と。ま。え。ぬ。年
 七十九なり。祖姑も壬寅。は。病。つ。ま。て。明。る。年。け。つ。つ。く。
 九十餘。よ。して。終。り。ぬ。花。の。ま。ハ。姑。の。り。ま。なり。ぬ。ま。ハ。ま。と。
 や。な。お。こ。い。み。く。厚。く。聊。れ。の。業。も。け。と。め。て。ハ。さ。せ。
 め。ず。食。ハ。か。あ。ら。ず。や。ら。ら。る。衣。ハ。か。あ。ら。ず。何。た。か。よ。夜。ハ
 側。よ。あ。り。て。ま。む。く。余。れ。か。へ。る。を。正。し。廁。よ。め。ま。ハ。あ。ら。ず。
 ま。は。是。等。の。事。や。ま。ま。あ。ら。れ。ど。花。は。あ。り。て。ハ。三。つ。の。

たらす女子も皆おれとあびてすてよこ三郎とのあひを
 子と養ひて次女ふめあをせり代は於鐘鉄とりて
 田がへ草ぎとこと初のごく花ハ夫よ後まことより
 来ハ髪もつらりて東條河やれはまき衣を着り其
 すがれま下よけいゆ一も老たる様は異あらずと書
 上げまよもみえくるがその行ひの美くやんごころは
 並ぶぞ稀なるべき天明六年の二月ふたたびをど下れり
 今年ハ花五十一となりぬ姑ハやまよおとろけて老と病
 ちまへ起り物々あつとまかりくれハ花日ごとハ魚を買て

一たびハ贈り一たびハ美し春ハワらびの軟るを求
 め秋ハ菌の鮮あるを得ていろりて食の進んことを祈
 り養のよきや也如く又幾回の春秋をむして姑
 ハ十餘ハ花も六十よけくなりぬ花天然よめけ道を和暁
 へん今ハ子も壯長ま孫もあす有まハ家け事専らあつら
 とも何うあらんよ於中も入るも姑よはげすみ物ぬあつ
 ても同承ずらりて至孝の性よあらざらざらてハのうで
 かく勉得べき寛政癸亥の十月例もれある三夜の賞行りま
 へるも宜あり頼惟種此人の事を詩よ詠いていそぐ

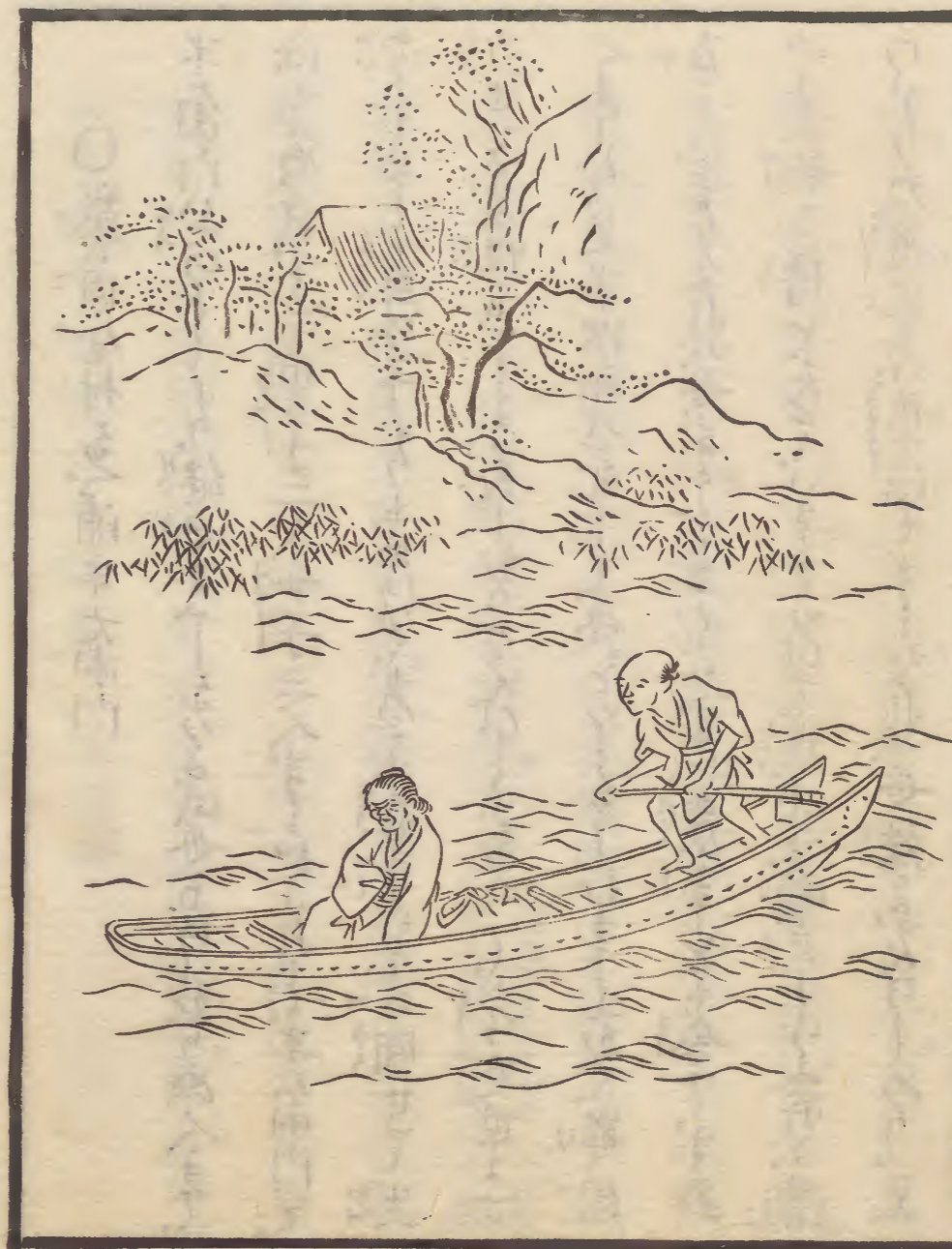
牛田農戶十餘口。一家性命繫一婦。家有祖姑齒甚
高。舅兮姑兮亦皓首。婦產五女皆羸弱。夫患肺癰膿
血嘔。舅亦痞積作煩病。二人呻吟臥甕牖。此婦一身
真金鐵。就養不怠。歲月久。燈火徹曉。奉湯藥。按舅摩
夫。左與右。豈欲須臾離膝邊。獨奈田荒乏粟糗。撫枕
懇告且戒女。雞唱荷鋤赴隴畝。孝義心頭銳於鋤。單
身稼穡優田叟。身雖在田。心在家。頻輟耘耨向家走。
昊天有意歲恒豐。納稅未嘗在。人後。餘力備賃何。太
健得錢時。買魚與酒。而姑引杯訢訢然。俱道新婦使

吾壽內外拮据已如此。職事猶且有所守。邨帶大川
置灞。廟守者歲給粟九斗。代夫日夜慎啓閉。一邨灌
溉托樞紐。千辛萬苦出一孝。遂膺褒典。矜賞厚嗟吾
端居閱今世。勤謹如斯。蓋罕有。敏乎誰如爾。力田婉
乎誰如爾。事舅因視都邑富人妻。躬纏錦繡。心却醜。
試聞牛田孝婦歌。歌闋慨然自沮怛。右前歌
有婦有婦牛田村。曾以孝義表其門。一身萬勞誰得
及。猶道無報舅姑恩。舅病將終婦深痛。真情抱持連
晨昏。祖姑尋逝夫先死。三奠送了獨姑存。春蕨秋茵

供_ス甘_ク脆_ク一夜三起問寒暄頭髮無膏狐枕潔寡鳥哀
 蹄曉斷魂逆境一去身稍安家迎佳婿已抱孫姑踰
 八旬氣奄奄身近六秩聽從敦戰兢奉持每事請強
 健依舊理田園力等丈夫心真婦剛柔天性由本根
 春花自表心德美那妨藍縷似老猿孝婦名花里人曰躬
被敝衣其醜似老猿
 公錫三至耀蓬華目今孰傳懿德尊前歌已闋後歌
 續遺美欲訪鄰里言往到柳渡逢鬻童童指杏花孝
 婦軒已識癡兒亦能知更看魚禽和氣繁願携妻孥
 此來畊牛田煙雨一犁春 右後歌

○敬言固屋村多浦半太南門

半太南門七のくくり継母まやふるるば母も何からぬ人よて
 源七のあ花とて男子二人女子三人まうけいれど半太南門を
 志するこま真の子よりも何はくあよ善事を言聞せて生
 立せくるが性もいよ美かりんびくありて孝友世ます
 ぐまより父半次郎ハ死して母をいよむ事ふかく終固
 屋よハ寺ナクハ母まうてまくんハ農事をも含てすみ
 やうよ船よ櫓をたてそとつひて扶れせ瀬戸より所漕
 りりぬ彼地よハ弟源七すいんハ母殊よたのめり又



妹ハ吉浦の弥三次よりイのは嫁せり。こゝも海面ちづらある
 日せをらひ母を兼行し。きづくる母が。彼地は田まはば。
 半太事門かゝるよい。名残を惜み。二三日の間さく待りひて。
 かまらず。行てまみぬ。又は雨ふる日ある。何とあつく心
 いかしく思ひ路のむご三里さうりあるを。夜ともつさず。浦
 けしひよ住て。母が安否をうかひ。ゆるらへらひ日をたげひ。
 其日よなまハ船して。ゆよまかりぬ。一度も人よまかせること
 なく。妹等もけしひよ母をとめ。思入とも。半太事つれこ
 ならず。渠が妻さへともわく。母をよむなすす。こゝ心うく

おりのくれば母もまことその心をきりていつかたぬくありぬ。
 その花ハ近き所よりまじバ朝夕たはひままたまきり妹婿いせむすこと三太ハ
 お負おまうくれバ半太甫はんたうの夫婦ふうふこれを助たすく。孫まご三次さんじが所ハ隔へまてても
 四五日よひけらちハ半太甫はんたうにうらやめて音ねはききり。源げん七ハ
 漁師いさなあり。是もめけらり。魚いさなを得とまばつらも母ははへ持もちありぬ。
 その外そのほか一族いっさく幼年えいねんのものよりたすまで孝こにあらざるいあり。
 天明四年ていめい十二月じふに半太甫はんたうのよ。米こめ若干せきんとたまひりまき。寛政三
 年くわんせい六月ろくふたつとび賣うりして鳥目とりめ五貫文ごくわんぶんとよふ。半太甫はんたうのし
 五十五ごじゅうごなりとらふ。

○坂村茂三郎

茂三郎ハ坂村の庄屋しやうゑをばしむひとちり實貞じつていすして地
 方かたは事ことよ力をばし。且かつ謙退けんたいすして。つげくも役やくあり
 たる顔かほせず。年としをたつと者ものハ禮儀れいぎもあつて。居ゐまば座ざを退ひきき
 行ゆハ路ぢをゆげらむりおけり。文ぶんもどつて。つげくも。つげくも。つげくも。
 て。つげくも。つげくも。つげくも。つげくも。つげくも。つげくも。つげくも。
 程ほどあり。夜よより。つげくも。つげくも。つげくも。つげくも。つげくも。つげくも。
 集あつめその後のちより。つげくも。つげくも。つげくも。つげくも。つげくも。つげくも。
 意いよ。つげくも。つげくも。つげくも。つげくも。つげくも。つげくも。つげくも。
 文書帖簿ぶんしょていぼの類るいをばし。つげくも。つげくも。つげくも。つげくも。つげくも。つげくも。

家を持めんず貢物は是ならず費の多きをすべからず
細く入るまめして隠るるも頑ある民も皆疑の心ならず又
少くもよきなりびたせしむれば一郷の人々農業者とせげ
貢物もまたならず争訟もすくなく風俗よろし是皆成郎
が功績ありとて寛政二年庚戌のとき格をすめて庄屋の
上席に置うれむ。

○蒲刈島新助

おまがり一まめ
おまがり下宿の重子下り新助とよぶ父は老よ身やま
しめて僅よ己が用ゆるもののみなり母もよ正もまじり

二代姉のいへはわが家日よおまがりしはひは限あり此
地の民におまがり松葉をとりて形積りてうんと書きよ
新助毎日入るやとりれてゆより碌は松葉をとりびの賃を得て
親姉をよあ朝ごとく起して雑炊をたきその膏を所を
己吸て厚を所をたす梳著やれ物取をらへ父母は枕
に居置目めいたまをいれめせ今自らつまの所(まう)いと
まへに姉の手をのりていかにいかにいかにいかに
近所をえらびね葉をとり負めよまをいよかまをらざりて家に入りて
父母はおりの衣の厚子薄をたは枕の高低をまめひ或ハ

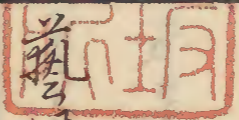
湯茶をすめ。或ハ烟草をすめ。きざして。又生ぬ。夜はまじ
 ずら。按摩。雨ふる日ハワラフと製つ。父母ハ打物かゝらひて。
 徒ふ外に出さず。新敷をまらり。夏ハ何つく。冬ハあぐえて。見ぬまじ。古着を。奥の
 布ハ蚊帳を張て。親の枕をおり。綿の夜の衣を。寒氣を防がむ。己ハ手拭。人見。あせ。
 あはめて。襦袢とす。姉ふせ。或日。父の。身や
 すく。稼穡を出さ。能り。年ゆ。骨折。不便
 涙が。わら。助。の。出。

すく。内ま。火。焼。家。母
 も。び。から。す。助。或時。瘡。け。い。を
 一日。あ。電。の。網。た。ち。ま。ち。絶。す。親。の。い。ひ。お。り。ん。を
 料。て。内。ま。て。ハ。押。は。み。草。鞋。を。あ。て。て。あ。い。と。あ。い。と。出
 る。う。ひ。日。と。り。あ。ハ。本。陰。岩。上。を。ま。り。て。獨。呻。吟。つ。や。執
 さ。む。ま。す。新。を。あ。て。家。を。か。り。あ。の。て。く。夕。炊。け。い。や
 な。こ。と。あ。い。る。孝。子。の。こ。ろ。い。げ。ま。う。浅。か。る。人。さ。し。れ。い。の
 童子。の。こ。ろ。更。よ。何。と。れ。よ。お。ろ。也。寛。政。三。年。辛。未。二。月。十。五。日。
 倉。米。十。俵。を。た。ま。り。お。助。今。年。十。七。も。り。る。と。ぞ。

孝義傳

卷二

三



仿孝王我傳卷二終

